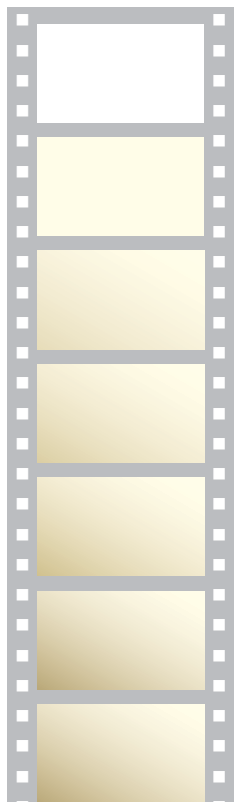


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第二十五回 「プレスリーとスパーク」①

サラリーマンの子どもにとつて避けられないのが親の人事異動に伴う転校です。ぼくは40年、サラリーマンをやりましたが、「生涯「アナ」と心に決め、他の職場への異動、そして転勤など、考えてもいかなかっただけに人事異動の発表があつた時はショックでした。

40年間で転勤は一度だけ、それも本人が希望してもなかなか住むことが出来ない「大都会・東京」でした。しかし、子どものことを考えると、長女は一年半後に大学受験を控えていたので、いまは動かせないと思いました。それは、ぼくの経験からでした。

ぼくの父の場合、転勤は5年に一度やつて来ました。名古屋支店から仙台支店に転勤になったのは、ぼくが高校二年、夏休み前のことでした。小中学校と違い、公立高校から公立高校へ転校するには欠員のあつた時、「転入試験」を受け、合格しな

ければならないのです。ぼくは、その苦しみを知っていただけに、長女は、女房カミサンの父母にお願いして青森へ残し、ぼくと女房、それに、小学5年生の二女と三人で東京へ行くことにしたのです。

話はぼくの転校について戻りますが、転入試験は8月下旬に行われることがわかり、夏休み前、ちょうど期末テストも終わったばかりで、友達と封切映画を観に行くことになりました。

当時、洋画でも邦画でも二本立の封切映画は当たり前でした。二本のうち一本がメイン、もう一本がサブ（添え物）でした。その二本立の封切映画で、二本とも満足したと思われる映画はなかなかありませんでした。

友達と観た封切洋画二本立は、エルヴィス・プレスリー主演のアメリカ映画「アカプルコの海」（63年、ハル・B・ウォリス製作、リチャード・ソープ監督、ウルスラ・アンドレス共演、当時は、アーシュラ・アンドレス）と、カトリリーヌ・スパーク主演のイタリア映画「恋のなぎさ」原題名「熱い生活」（64年製作、フロレスター

ノ・ウアンチーニ監督、音楽カルロ・ルステイケリ)。この二本立は満足した作品でした。

「アカプルコの海」(原題名の通り)は、プレスリー主演映画33本のうち、13本目の作品で、映画のタイトルも13文字 (F^①U^②N^③ I^④N^⑤ A^⑥C^⑦A^⑧P^⑨U^⑩L^⑪C^⑫O^⑬) となっています。

物語は、メキシコ南部太平洋岸にある世界的リゾートエリア「アカプルコ」が舞台。

歌のうまい人命救助隊員のマイク(プレスリー)は、ある事故で相棒を死亡させてしまいます。マイクはそれがもとで高所恐怖症になりますが、アカプルコで水夫として働いたり、ホテルのショーで歌ったりして、最後にはそのトラウマ(精神的外傷)を克服しようと、観光ポイントで有名なケブラーダ海岸のダイビングに挑戦するまでを描いています。

ぼくは、プレスリー主演映画すべてを観ているわけではありませんが、ストーリー

は、アメリカのどこかの町へやって来た歌が好きな若者が、若い娘たちとロマンスの花を咲かせ、町を活性化して去って行くというワンパターンです。邦画で言えば「若い寅さん」を描いたおとぎ話です。

調べてわかったことですが、この映画のロケにプレスリーは一度も参加していないのです。彼の出演シーンはすべてハリウッドのパラマウントスタジオでスクリーン・プロセス（前もって撮影した背景になる画面を、スクリーンの後方ないし前方から映写し、カメラの前景に対象を置きいつしよに撮影する方法）というシステムを使い特殊撮影されたのです。

プレスリーは歌手が本業ですから、映画は新曲PRのためで、「本当は、レコード販売促進のため、同じパターンの映画でも出演したのではないか」とぼくは思いました。

映画「アカプルコの海」では、11曲の新曲が発表されました。アメリカではサウンドトラックアルバムが第3位に、また「ボサノバ・ベイビー」はヒットが伸び悩

みました。一方、日本では甘いバラードの主題歌「アカプルコの海」がヒットしました。

人によつて好き嫌いはありますが、ぼくは、「アカプルコの海」が好きです。しかし、ぼくにとつて何と言つても最高のプレスリー映画は「ブルーハワイ」です。好きな曲がいっぱい詰まっています。

(続)

文中敬称略

伸

平成23年8月